

構造家・坪井善昭 降り出しに戻って眺めよ!

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■何故からの発想

東京藝術大学教授を経て名誉教授を勤め上げ、退官してから(2007年)10年余りになる。構造家・坪井善昭さんは『力学・素材・構造デザイン』(建築技術2012年、共著)で、「素材と空間構造デザインでコンクリートによる構造フォルムの変質」を述べ、「空間構造デザインの原点ではトロハと坪井の設計思想」を展開した。構造界を牽引する構造家が、各自それぞれ独自に繰り広げる構造デザインの世界は読み物としても魅力的だ。

鎌倉駅に程近いカフェの屋下がり。若々しく扉を開ける姿に「坪井先生!」と覇志堂が駆け寄る。再会の挨拶も嬉しく、早速坪井さんが出した参考資料に目をやる。構造計画教授の最終講義資料が、華やかなコーヒーの香りに包まれて、「なぜ技術の分野を選んだのか」からレクチャーが始まった。古代から現代テクノロジーの発展を紐解いていく。その結論は「建築の“構造”は形態や機能を規定し、空間の安全性や耐久性を保証する最も重要な要素である」。

■父坪井善勝が怒る

大構造家の父をもつ。長男が後を継ぐものだという考えの時代だが、進路について強制されることはなかった。ただ、度々耳にした「俺は世界と闘っている」という言葉の中に強いメッセージが込められ、それに対する反抗心があったと語る。また、学生に対する姿勢を時々見せていた。学生たちが成績を上げてもらおうと、酒をもってやって来るがあった。そのとき「いい加減にしろ!」と声を荒げたのだという。教育者になると睨んだ息子への教育だったのかもしれない。

「やってみるか」といわれて学生時代に設計したのが佐世保の建築。できるだけ景観を壊さない展望台をつくった。土砂をできるだけいじらない発想で地盤を生かせないものかと、考えを進めた。米軍基地の

手を借りて、ヘリコプターで屋根を釣り下ろす画期的なアイデアもそのひとつだった。具現化しなかったが今でも活かせる着想だと語る坪井善昭さんは、青年時代そのままのスピリットをもっている。

早稲田大学では建築家・今井兼次先生の門下生。ガウディに対しての考えはあくまでヨーロッパのゴシック教会建築という捉え方。ここでも師とは違う見方をする。「青臭かったなあ」と自己分析するのでした。

■循環型社会への提言

環境負荷低減を考慮した事例で、構造概念図がある。「地盤に優しい水枕」とユニークなネーミングの構造概念。海のパビリオンの設計コンセプトだ。地盤掘削による土砂の流出がなくなるから、珊瑚礁の死滅を防ぐことができる。海水を入れたマット(水枕!)を開発する。「上部・基礎構造の荷重は完全な等分布荷重として支持地盤に導かれる。最も合理的な荷重伝達システムとして」。海水マットの底部は地盤の凹凸に準じた形状となる。支持地盤に負荷を与えない軽量構造とし、運搬・建設・撤去作業の簡便性を図る。廃棄物ゼロの循環社会への提言は列島改造景気の当時は「受け入れられなかった」と少しだけ肩を落とす。

コンピュータ時代への警告(建築知識1972年12月号)は、内藤多仲(1886~1970年)の計算尺の話が面白い。「計算で出て来た数字だけを信頼するのは危険である。一度振り出しに戻って、大づかみに眺めてみるということが大切である」、このアンダーラインを引いた部分が坪井さんの警告でもある。

覇志堂「渡辺邦夫(本コラム78回)さんが残念がっていた。坪井さんは何故物をつくらないかと」。

坪井「斜に構えていましたからね」。言葉の重みに頷くばかりなのです。

